慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	住吉物語以後 : 繼子苛め譚の類型に關する一考察
Sub Title	After the "Sumiyoshi" story : On the types of stepmothers maltreating their stepchildren
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1954
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.3, (1954. 1) ,p.17- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00030001-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

住吉物語以後

——繼子苛め譚の類型に關する一考察——

松本隆信

一、繼子苛め譚の盛行

繼子苛めの話は、周知の如く、世界的に極めて廣い分布をもつ、民間說話の一つの類型である。日本に於ても、北は東北地方の果から、南は九州より更に海を隔てた南島の島々に至る迄、全國の各地から採集せられた、繼子苛めの昔話は、既にかなりの數に上つているのであるが、嘗てはこれが中央でも文學の主題として好んで用いられた一時期があつた。鎌倉時代に入つてから改作せられたと言われている住吉物語は、落窪物語と共に、この種の文學の先蹤とされている。

現存住吉物語は、日本の物語の中でも、異本の著しく多いものとして知られ、その種類も描寫の緻密なものから、殆んど筋書に近い程度に省筆せられたものまであつて、極めて複雜な外貌を呈している。住吉物語の異本については、西下經一氏の詳細な研究があるので、（住吉物語の形態に關する研究、岩波講座日本文學所收）それに依つて見れば、次の如くである。

甲類　略本にて描寫の部分が少く、草紙ともいうべきもの

第一種　お伽草紙の如き形態を有するもの

第二種　繪草紙の如き形態を有するもの

乙類　廣本にて描寫の部分が多く、物語と稱すべきもの

第三種　流布本及び之に近いもの

第四種　流布本と比較して相當に大きな增補があつて作品の分量も多いもの

この中、第四種に屬する神宮文庫本などは、氏の調査では、使用文字總數が、およそ四萬に達するのに對して、第一種の京都博物館本は、約一萬七千であり、分量に於て、前者の半分にも滿たない。しかも、それは一部の拔書といつた性質のものではなく、根幹をなす筋は殆んど一致しており、ただ場面描寫や心理描寫が極度に省略せられ、筋書化されている結果なのである。

このように、一つの物語が一定の形を保たずに、時を逐うて變化してゆくのは、平安朝以來、物語文學の上に見られる顯著な傾向であるが、その程度が甚だしいのは、それだけ長い間、多數の讀者に依つて、もてはやされていた事を物語つている。一體、住吉物語の名は、既に源氏物語や枕草紙にも見え、早くからこの名の物語が存在した事が知られる。しかも、源氏物語の螢の卷には、「住吉の姫君の、差常りけむ折は、然るものにて、今の世の覺えも猶心殊なめるに、主計頭が、ほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思し准へ給ふ。」とあり、これが現存住吉に於て、繼母が繼子を憎むの餘り、主計助という翁に姫君を盜ませようと謀つた條と、一致しているので、繼子いじめを主題としていたかどうかは不明としても、この新古二種の住吉物語が、全く別物であつたとも考えられず、恐らく徐々に書き變えられてきたのではないかと、推定されているのである。現存住吉と古本住吉の關係については、私は從來の研究以上に出る材料を持合せていないが、ともかく、鎌倉時代に入つてから、住吉物語が著しく流布した形跡のある事は、上の如き異本の存在からも窺うことが出來る。

ついで、室町時代に入ると、お伽草紙という名で呼ばれる群小作品の中に、數多くの繼子苛め譚が輩出した。横山重、太田武夫兩氏の編纂せられた、「室町時代物語集」に收められたものだけでも、次の十三種類に上つている。

箱根權現繪卷　伊豆箱根の御本地　月日の本地（つきみつの草紙）　岩屋の草紙　秋月物語　ふせやの物語　美人くらべ　朝顏の露　花世の姫　姥皮　鉢かづき　白菊草紙（一本菊）　小落窪　（括孤內は同種異名のもの）

又、やはり同じ頃から流行し出した說經節にも、特に好んで繼子いぢめに筋立を借りた跡が見え、同じく横山氏が蒐められた「說經

節正本集」の中には

愛護の若　俊德丸　熊谷先陣問答　越前國永平寺開山記　尾州成海笠寺觀音の本地

など、かなり多くの繼子いじめの話を見出すことが出來る。

鎌倉室町時代に至つて、このように、繼子いじめを主題とする文學が、盛行した動機は、何であつたろうか。それには、色々な理由があつたかも知れないが、第一に考えてよいのは、繼子いじめの話が、家庭の子女の情操教育という面で、非常な効果があつたという事であろう。武家階級が擡頭するに伴なつて、族制も變化し、近世の社會に見られる様な所謂封建的家族制度えの推移を見せてくるのであるが、そこには當然、家の道德の基幹として、孝という問題が重視されてくる。御伽草紙の類には、孝の德を說いた話がぼつぼつ見えているが、そういつた目的の爲には、生みの親の有難さを教える、繼子繼母の話は、實にうつてつけであつた。前記西下經一氏の諸本解說の中で、第一種の京都博物館本については、用紙、裝釘等から推して、これを嫁入本であろうとされているが、これも住吉物語が、家庭教育の上に適切な讀物として考えられていた事を、示すものではなかろうか。物語が純粹に文學として鑑賞されるのでなく、專ら教育上の目的に使われ、その爲に需要がふえてくるとすれば、筋書的に書きつづめられた種類のものが現れたのも、又、當然と言える譯である。

然し、繼子苛め譚を盛行せしめた有力な動機が、こういつた家庭の子女の情操教育の上に果した役割にあつたとしても、これのみを以て、その出現を完全に說明し切る事は出來ない。繼子苛めの物語が出來るには、もつと深い素地があつたことを考えねばならない。これについては、後に住吉系統の物語の筋立を考察する事に依つて、明らかにしてゆく積りである。

二、繼子苛め譚の成長

繼子と本子

先に擧げた室町時代物語集の繼子苛め譚には、又幾つかの類型が見られる。中でも、秋月物語、ふせやの物語、美人くらべ、岩屋の草紙、朝顏の露は明かに一つのぶろつくをなして居り、特に前の三つは、登場人物が違うだけで、住吉物語と殆んど筋を同じくしている。いはば、住吉物語の一異本とも言つてよい作品である。住吉物語が既に述べた通り、御伽草紙に近い形態をもつ異本を生み出していたことから考えれば、こうした類似作品の現れたのも、自然の成行と言えるだろう。だが、更に細部の趣向に迄立ち入つてゆくと、その間には僅かづつの變化を見ることが出來る。そこで先づこの住吉物語系統の幾つかの作品を中心として、繼子苛め譚の成長を考えてみたい。

この系統の話で第一に注意しなければならないのは、繼子と並んで本子、即ち繼母の實子が登場して來る事である。都のさる公家の家に姉妹の姫君が居る。繼子である姉君の方が、みめかたちが勝れているので、時の權家の若君に求婚される。繼母がこれを嫉妬して妨害するというのが、物語の發端である。繼子と並んで本子が出てくるのは、我が國で採集された昔話にもかなり多く、しかも、繼子と本子との關係は、繼子苛め譚を分類する一つのめどとなつている程、重要なものである。民俗學辭典の繼子話の項を見ると、日本のこの種の昔話を凡そ四つの類型に分け、

（一）糠福米福系 ⟨ 皿々山系 / 姥皮系 / 繼子の推拾ひ系

（二）お銀小銀系
（三）繼子と笛系
（四）手なし娘系

としているが、この中、（一）と（二）は一見して訣る通り、話の中に登場してくる繼子と本子の、一番普遍的な名前をとつて命名したものである。そして、糠福米福の話では、本子は繼母と一緒になつて繼子を苛めるのに對して、お銀小銀の方の本子は、氣だてがよく、いつも腹違いの姉の味方をして繼母の虐待から庇つてやるのであつて、姉妹の關係を中心として見る時、兩者は顯著な對照を見せているのである。柳田國男先生は、本子の立場のこの樣な變化に關して、後者は繼母の慘虐性を強調する爲に發達して來た一つの型であり、説話の成長を物語る興味深い要素であるとの解釋を示されている。つまり、糠福米福の系統では、本子は全く無性格な人間で、單なる繼子の引立て役を演じているに過ぎないのが、お銀小銀の方になると、これに一つの性格が附與せられてくるのであつて、その意味で、繼子話としてはすゝんだ段階にある譯なのである。では、住吉物語など中世の記錄文藝の中に登場する本子は、一體どんな姿を見せているであろうか。

住吉物語では、宮腹の女との間に儲けた、中納言の一番上の姫君、卽ち大君が繼子で、中の君、三の君が、今の北の方の實の娘である。右大臣の御子で四位少將という世に勝れたる貴公子が、その大君の噂を聞いて、見ぬ戀にあくがれ、想いを述べた文を姫君の許え送る。これを知つた繼母は、文の仲立をしている女を「さやうの公達は、人にいたはられむとこそ思すべけれ。母もなき人よりは、三の君のねびまさり給ひたるに、さるべきさまと思ふに、みみよりにこそ。たばかり給へかし。さらばそこをこそ、この世ならず思ひ侍らめ」などと、詞巧みに語らつて、實子の三の君に文の返事を書かせ、それを少將の許え屆けさせる。こうして少將は、たばかられたとも知らずに、三の君の方え通う事になるのだが、やがて、はじめ想うて居つた相手と違う事に氣がつく。それからは次第に三の君とは疎遠になり、再び大君の方え近づいてゆくといつた經過を辿るのである。

ここでは、本子である三の君は、母君の指圖の儘に動いたのであつて、自ら姉の大君と少將の戀を競つたのではない。それどころか、

後に大君が失踪して行方が訣らなくなつた時「中の君三の君なども、姫君のことにふれてあはれに、侍從が萬をかしかりしものを、あはれ如何なる所に住みて都の事をおぼし出づらむ、と忘るる時なく忍びつつ泣き給ふ。」とある樣に、むしろ腹違いの姉に對して優しい心を持つていたのである。けれども、そうかと言つて不遇な姉に積極的に助力を與えるという事も無かつた。中の君も三の君も、物語の筋立の上では、極めて消極的な存在なのである。

ふせやの物語や、美人くらべも、住吉と殆ど同樣で、本子はほんの脇役を勤めているに過ぎない。ただ、秋月物語になると、この點が特に顯著な變化を示していて注意を惹く。秋月物語では、繼子はあいきやうの君、本子はあいしの君と呼ばれているが、時の關白の御子二位の中將が、あいきやうの君に求婚するのを、繼母が策略を廻らして、實の娘のあいしの方え引き入れる迄は、住吉物語と全く同じである。ところが、このあいしの君は、腹黑い母親とは似もつかない心の淸らかな娘であつた。侍女の口から、中將が自分の許え通つて來るのが、母親にだまされた結果であつて、本當の志は姉のあいきやうにあることを知らされた後は、自らは進んで身を引き、中將と姉との間をとり結ぶ爲に獻身的な努力をする。中將に文を書かせて、その仲立をすることは勿論、しまいには姉が容易に中將に身を許そうとしないので、琵琶彈きの女と僞つて、女裝した中將をあいきやうの部屋え忍び込ませる手引をするといつた程の働きぶりである。ここに至ると、本子の占める位置は遙かに重くなつてきている。秋月物語に登場してくる人物の中で、一番性格のはつきり書けているのは、このあいしの君であると言うことが出來る程である。この物語の前半の興味は、全くこのあいしの君の働きにあり、家庭の子女の情操教育という當時の小說のもつ役割から言つても、こうした美しい行爲が、大きな効果を與えたのではないかと想像される。

お銀小銀、或はお月お星と呼ばれる昔話の代表的な形は、繼母があれこれと手を變えて繼子を殺そうとするが、その都度妹に妨げられて目的を達しないので、最後に石の唐櫃に入れて山奧に生埋にする。妹は姉に、運ばれる途中櫃の穴から蒔いてゆけと言つて菜種を渡す。春になつて菜種が成長し花を開いた時、その跡を辿つて生埋にされた場所を尋ね當て、姉を助け出すというのであるが、この種類の話は、既に安居院の神道集の中に見えている。卷第二、「二所權現の事」がそれで、菜種の代りに、檜の削屑を落してゆくことの

外は、不思議な程の一致が見られる。（室町時代物語集に載せられた箱根權現縁巻も、神道集と同じ話であるが、この方は巻頭が缺けている。）これに依つて見ても、今ある民間のお銀小銀系の繼子話が、決して近世の新しい變化ではなく、既に中世に於て、これだけの成長を遂げていた事が訣るのである。住吉物語と秋月物語の間に見られた、本子の性格の發展も、この民間説話の成長と無關係に生じたものとは思われない。

落窪物語の位置

ところで、こうした繼子と本子の關係から見て、疑問の起るのは、繼子苛め譚の祖とされている落窪物語である。落窪は、宇津保と並んで、源氏物語以前の作品とするのが、一般の常識となつているけれども、現在見られる落窪物語は、繼子物としてかなり進んだ形を示しているのである。この物語では、繼母の實の娘として四人の女君が見え、この人々は繼子の落窪の君とは餘り交渉もなく、むしろ非同情的なのであるが、ただ一人男兄弟の三郎の君だけは、姉君に加擔して相當の活躍をしている。落窪の君が物置の様な所え押し込められた時も、父母の寵愛を利用して隱れて外部との連絡の役を勤めている位である。このように本子の中に繼子の同情者があるという點では、秋月物語に近く、住吉よりは進んだ段階にあると言うことが出來よう。

落窪物語が、繼子苛め譚として發達した姿を見せていることは、繼母の性格や、繼子の境遇といつた方面からもつとはつきり窺うことが出來る。住吉物語及びその一類の作品では、繼子が權家の若君の寵愛を得た事から繼母の嫉妬を買つて迫害されるようになるけれども、それ迄は格別虐待を受ける事もなく、對の屋で女房達にかしずかれ、妹の寶子達と變らない生活をしている。譬えば、岩屋の草紙などは、父中納言が先妻の忘れ形見である姫君を殊の外寵愛し、西の對を玉の如くしつらえてかしずいた爲に、姫の名を對の屋姫と呼んだと言う程である。住吉物語では、父の中納言が宮腹の女との間に儲けた姫君を、その母が亡くなつた後、手許に引き取り西の對に住まわせるのだが、その條にも、

繼母こころの中にはいかが思ひけむ、人ぎきには聞ゆるやう、「誠に母宮におくれ給ひて後、迎へ奉らまほしう侍りつれども、今日々々とのみ思ひて過しつるに、わかき人々あまたおはする、互につれづれ慰めて、いと嬉しきことにこそ。いかにをさなき心地に、その昔戀しくおぼし出づらむ。あなあはれや」

とあつて、繼子の境遇が特別惡かつたようには書かれていない。

ところが、落窪物語は冒頭から

今は昔、中納言なる人の、女數多もたまへるおはしき。大君、中の君には聟どりして、西の對、東の對に、花々として住ませ奉り給ふ。三四の君にも、裳著せ奉り給はむとて、かしづきそし給ふ。また時々通ひ給うけるわかんどほり腹の君とて、母もなき御女おはす。北方心やいかがおはしけむ、仕うまつる御達の數にだに思さず、寢殿の放出の、又一間なる落窪なる所の、二間なるになむ住ませ給うける。君達ともいはず、御方とはましていはせ給ふべくもあらず。名をつけむとすれば、さすがに、大殿のおぼさむ心あるべし、と慎み給うて、「落窪君といへ」と宣へば、人々もさいふ。

とある樣に全くの差別待遇を受けている。着る物も滿足に與えられず、その上、縫物が上手なところから、妹達の聟に着せる仕立物を次から次えと夜寢る暇もない程あてがわれ、少しでも遲いと、「かばかりのことをだにものうげにし給ふは、何を役にせむとてならむ」と責められる。又、中納言一家が揃つて石山詣をする際にも、中に、「落窪の君率ておはせ。ひとり留り給はむがいとほしきこと」と言う人があつたが、繼母は、「さてそれがいつかありきしたる。旅にては縫物やあらむとする。なほありかせそめじ。うちはめて置きたらむぞよき」と、全然問題にせず、姫君一人だけはとり殘されるといつたみじめな有樣であつた。

こうして見てくると、落窪物語が、住吉物語などよりも、繼子の境遇に關して遙かに具體的な記述に富んでおり、繼子苛め譚としての色彩が濃厚になつていることが訣るであろう。それは丁度、お銀小銀系統の昔話が、本子の立場の變化に伴なつて、繼母の繼子を虐げるくだりが、糠福米福のそれよりも、一段と詳密になつている事實と一致する。糠福米福系の一類話である皿々山の話では、繼子が本子との歌較べに勝つて殿樣に貰われてゆくところが話の一番のやまであるが、お銀小銀の方になると、興味の中心は、繼子を手を變

え、品を變えていじめるところに移つてしまつている。昔話採集標目に載つている、陸前志田郡の例を擧げると、最初は姉には底なし袋を、妹にはよい袋を與えて栗拾いにやる。妹は一杯拾つたが、姉のには溜らないので、妹は姉の袋と取換え空の袋をもつて歸る。次には姉の御飯に毒を入れて殺そうとすると、妹が茶碗を取換える。三度目には姉の寢ている處を槍で突殺そうと企てるが、妹がこれを知り、姉を自分の床に寢かして助ける。そして最後に、前に述べた、石の唐櫃に入れて山に生埋にする段になるのである。つまり、皿々山の方は、昔話で心がけの良い者の成功を一段と印象づける方法として慣用される隣の爺型に近く、惠まれない繼子が、その才能に依つて幸福をかちとるという點に、この話の趣意があるのだが、それが繼子の境遇の方に力をこめて語るようになると、お銀小銀の樣な型が出來てくる譯である。

器量較べ

昔話と對比しながら落窪と住吉を比較する時、もう一つ、非常に都合の良いものがある。それは、住吉物語をはじめ、ふせやの一本、美人くらべなどに見える器量較べの趣向で、これが今言つた皿々山の歌較べと趣旨が全く同じだからである。皿々山の歌較べというのは、これも昔話採集標目の例に依つて示すと、

昔、繼母が繼娘には毎日洗濯をさせ、木子は遊ばせている。ある日、繼娘は洗濯をしながら「あの山の躑躅棒をご覽じやれ、せい細けれど花は咲くとん」と歌う。殿樣が橋の上でこれを聞き、感心して差し出せという。繼母は妹をやる。御殿の玄關に盆に皿をのせ、それに鹽を積んでその眞中に竹と松が植えてある。殿樣がこれを歌に詠めというが、木子は詠めない。殿樣はもう一人の娘を出せという。繼娘は御殿に行き、玄關の飾物を見て「盆皿や盆やさら竹山雪降りて、雪を根としてそだつ松かな」とよむ。殿樣は姿は汚いがこれに違いないと奥方にする。

という話である。

住吉物語では、四位少將が三の君の許え通つている中に、それが自分の志す姫君ではないことに氣がつき始めるが、或る日、中納言の姫君が三人揃つて嵯峨野え野遊びに出かける事を聞いて、自分も嵯峨野え赴き、木蔭から車を降り立つた姫君達をかいま見る。ここで大君が、現在の妻の三の君よりも數段と容姿の立ちまさつている樣を目の當りに見て、少將の大君に對する戀心は一層募つてくるのである。昔話の歌較べと言い、この器量較べと言い、繼子が本子よりもすべての點で勝つていて、將來幸福をかち得た事が、自然の道理であつたことを示す一つの手段であつた譯だが、もう一つの美人くらべの方になると、後代的な色彩が濃い代り、この目的は一層明かになつてくる。

都に隱れなき丹後の少將という人が、妻を求めていた折柄、五條の宰相殿の姫君に、のもせ姫（繼子）、しらん姫（本子）という美人の聞えの高い姉妹がいることを聞き及び、姉妹の乳母の許え夫々一目見たき由を申し入れる。王朝貴族の結婚の習慣から言えば、求婚に先立つて、表立つての見合を申し込む樣なことは考えられないのであつて、父の宰相もこれには「むすめを見するといふ事、いかが也。」と言つている程であるが、結局、姉妹を揃つて淸水え詣でさせることにし、その日取を少將の方え知らせる。少將はその日、女に姿を變して物蔭から姉妹の容姿を見較べた結果、器量の數段すぐれた姉ののもせ姫を妻に迎えることに決めるのである。住吉、ふせや、秋月など同類の作品が、何れも主人公である姫君の流寓した土地の名を以て物語の題名としているのに對して、一つだけ異つた名づけ方をしている美人くらべは、その題名からしても、器量較べの趣向により多くの比重がかかつていたことが察せられると思う。

以上、中世の繼子苛め譚を、現存の昔話と對照して見てきたところを綜合すると、住吉物語及びその一類の室町小說が、繼子話としては初期の段階にある糠福米福の系統の話に近く、それより古かるべき落窪物語の方が、却つて一段と進んだお銀小銀系に近づいている樣子を見せているという結果になる。現存落窪の成立年代が、普通の常識よりもかなり引き下げられるべき事は、折口先生の早くからの御說であつたが、假に室町小說などよりも文獻的には古いとしても、記錄せられた時代を以て話の內容の新古迄決める事は必ずしも妥當でないのである。この場合も、單に文獻としての古さから、落窪物語を我國の繼子物語の祖という風に、文學史上の位置づけをすることは、反省を要するのではないかと思う。

三、繼子苛め譚の周圍

女性流離譚

前節に於て、住吉物語や、その模倣作品とも言うべき室町小說の一類が、落窪物語と比して、繼子苛め譚としてはむしろ一つ前の段階にあり、繼子いぢめの色彩は、それ程濃厚に現れていないことを見てきた。從來の室町小說に關する分類の仕方を見ると、多くの場合、繼子物という一部類を設け、ここで研究の對象としている樣な諸作品をその中に收めているのであるが、こういう分類の仕方が、本質的に妥當であるかどうかという事には、疑問をさしはさむ餘地がありそうに感ぜられる。物語の發端に於ては、筋立を繼子いぢめに借りているが、その主要な要素はもつと別の處にあるのではなかろうか。そう考える理由は、前にも觸れたが、住吉、ふせや、秋月等の物語が、主人公である姫君のさすらいの生活を送つた土地の名を以て題名とした事からも窺えるように、かよわい女性が自分の家を離れ、遠い異鄕に流浪の生活を送るということが、繼子苛めの物語の最も有力なたいぷになつているからである。

住吉物語の大君は、繼母が主計助という目うちただれた七十ばかりの翁に姫君を盗ませようと計畫していることを、かねて心を寄せていた繼母方の女房から聞いて、その前に住吉に住む緣者の尼を頼つて自ら繼母の許をのがれ出る。又、秋月物語、ふせや、美人くらべ、岩屋の草紙、朝顏の露の宮等では、繼母が武士を語らつて姫君を館から奪い去らせるという風に、手段がより直接的になつている違いはあるが、これに依つて、主人公の女君が流離しなければならなくなつた事に於ては、全く同じである。そして、こういう迫害を受けるに至つた直接の動機は、繼母の意に反して、繼子の方が權家の若君の寵愛を得たところにあつた。繼子いじめの物語に於ては、主人公の姫君が繼子の境遇にある爲に、繼母の嫉妬という理由から、こうした經過が極く自然に說明され、讀む者をして殆んど抵抗を感ぜしめない。從つて對象を繼子苛め譚に限定している限り、ここから問題は起らないのだが、今少し視野を擴げて觀察すると、繼母

繼子といつた關係の無い場合でも、やはり同じ樣な理由、卽ち親の承認を得ずに他男と契りを結んだことが原因となつて、親の怒りに觸れ、家を追い出された姫君の話が、この頃の文學には、幾つか發見出來るのである。

その例として、先ず天稚御子の物語を擧げることが出來る。天稚御子の物語と稱するものには、全く內容の異つた二つの種類があり、しかも兩方とも別名を「たなばた」と呼んでいる爲に混亂し易いのであるが、ここに引くのは、室町時代物語集に收載された番號で言えば、三七及び三八番のそれである。差當り必要のあるはじめの方の部分だけを紹介しよう。

三條萬里小路の內大臣の弟姫に、容顏美麗の姫君があつた。八月十五日の夜、ひさしの間に出て折柄の滿月を眺めていると、天上からその姿を見た天稚御子が心を惹かれ、その夜から人知れず姫君の許え通うようになつた。やがて姫君に懷胎の身となつたが、折節、時の帝から姫を后に奉れとの宣旨がある。父の大臣は喜んでその準備にかかつたが、姫の既に懷妊していることを知ると、怒りの餘りこれを放逐してしまう

天稚御子が地上の妙なる音樂に誘われて、天界から天下るという話は、宇津保、狹衣をはじめ平安朝末から鎌倉えかけての物語などによく見られる趣向であるが、ここでは、人間の處女と他界の靈物との婚姻という、所謂三輪山式神話の形をとつている。この物語では、素性の知れない父親の子を孕んだことと、その爲に天子の后となる幸運をとり逃したことが重なつて、姫君が處罰されるに至つたのであるが、これと殆んど同種の趣向を發端に於てもち、しかも女性の流離譚としては、更にはつきりした姿を見せているものに、淺井御本地御出來記と稱する物語がある。

下野國の五萬長者という人に、みめかたち世に勝れた一人の娘があつた。姫君が或る夕暮、誦經をしていると、月の桂男が白蛇となつて舞い下り、姫の胸中に飛び入つたが、それより姫は懷胎の身となつた。時に都に源玄官公と申す公卿があり、この長者の姫の噂を聞いて見ぬ戀にあくがれ、遂に遙々東え下つて姫を妻に乞う。長者は一も二もなく承引したが、この時になつて、姫君の懷妊していることが露れ、大いに驚く。やむなく玄官公の手前は、姫が急死したことにして、僞りの葬式迄營んでとり繕う。一方姫君は不義をした咎によつて、せんだんという馬に乘せられ、國の外え追放される。

これと同じ内容をもつていながら、源藏人物語という異つた題名をもつ本が二種類、室町時代物語集には併せて載せられているが、その方では、姫を懐胎せしめたのは、月の桂男ではなく、長者の郎等である判官太夫という男になつていて、異類婚姻譚としての性質は失われている代り、不義という考え方の上では、餘程合理化されてきている。

この様に、實の父親に依つて娘が家を放逐され、流離の境涯に落ちる系統の話としては、更に五説經の一つとして有名な小栗判官を忘れることは出來ない。これはよく知られた話であるから、梗概ばかり幾つも並べることは省略するが、相模の郡代横山なる者の弟姫、照手姫が父親の爲に牢輿に入れられ、海え突き流されたのも、やはり親の許しを待たずに都から下つた小栗判官を聟に迎えたからであつた。しかも、前の天稚御子の物語や淺間御本地御由來記では、姫が人知れず懐胎していた爲に、折角の出世の機會をとり逃したのであるから、父の怒りを買つたことにも、幾分の理由は見出せる譯であるが、この小栗判官になると、小栗の方から一方的に押し掛け聟に入つたのであつて、照手姫には何の罪も無く、又、これに依つて父横山に不利益な事が生じた譯でもない。ただ、横山が小栗の傍若無人の振舞に腹を立てて、毒酒を盛つてこれを殺した後、「人の子を殺し、我子を助けおくならば、都の聞えもあしかるべし」と言つて、姫をも海に沈めるよう命じたのである。小栗が舅の横山の程度以上にむごい扱いを受けねばならなかつたのも、我々には理解しにくい事だが、これはかの大國主命が須佐之男命の許で幾度か死に直面する程の艱苦を經驗した後に、はじめてその女須勢理昆賣との結婚を許されたのと同じく、青年が一人前の人間として成人の社會の仲間入りをする爲には、きつい試錬を受け、その關門を通り抜けなければならないという古來の教育法に關する考え方が根本にあつた事は確かである。一旦死んで冥府に赴いた小栗が閻魔王の計らいで再び蘇生し、遂には照手姫との結婚を成就したのも、この話の性質を明瞭に物語つている。同様に、我々にはひどく不自然に感ぜられる照手姫の境遇が、こんな説明にならない説明で、あの時代の人々にはすらすらと受け容れられたのは、やはりそれが深い民族の信仰に依つて支えられていたからだと考えるより外はない。繼子いじめの話では、照手姫の場合などに較べれば、姫君の流離しなければならなかつた理由が、比較的自然に説明されているが、これも物語の上の説明が本來の理由であつたかどうかは、考え直さなければなるまい。

密通をした女が、うつぼ舟に乗せられて流されたという話は、近世の傳說めいた書き物の中にも見えていて、昔の人々の根强い空想であつたらしく、これ迄擧げてきた幾つかの物語も、これと無關係に生じたものではなかつた。だが、うつぼ舟の事は、柳田先生や折口先生に數々のすぐれた論考があり、今更それを鸚鵡返しにするのも氣がひけるから、もう少し方面を變えて、この點を考察してみたい。

玉鬘と飛鳥井姫君

小栗判官の照手姫や、天稚御子の物語、淺間御本地御由來記の女主人公達が、親の意に反した結婚をした爲に、その家に居られなくなつた點では、繼子という境遇を拔きにすれば、住吉物語などの姫君と結局同じであつた事を言おうとしたのであるが、流離の原因は暫くおいて、單にさすらいの女性に關する物語ならば、遠く記紀萬葉の世界から、日本文學の上には幾つでも見出すことが出來る。繼子いじめの物語が多く現れた鎌倉室町の時代に近いものを、幾つか拾つてみよう。

光源氏の流謫の生活を描いた須磨の卷は、流離譚の文學として最も完成されたものと言えようが、一方、この物語に登場してくる數多の女性の中にも、そうした悲劇的な境遇を經驗した人々が幾人か見られる。中でも繼子物語のさすらいの姫君の類型と比較して注意を惹くのは、玉鬘である。玉鬘は母夕顏の亡き後、都には頼りとするものもないままに、乳母に伴なわれて筑紫え下り、十年餘りの佗しい年月を送つた。やがて其處にも居辛い事情が起つたので、逃げるように再び都え上り、長谷參籠の折、ふとした緣から夕顏のかつての女房であつた右近に逢い、源氏の手許え引き取られることになるのであるが、その長谷え詣でる道すがらの玉鬘の胸中を述べた、次の樣な詞がある。

如何なる罪深き身にて、斯かる世にさすらふらむ。我が親世に亡くなり給へりとも、我を哀れと思さば、おはすらむ所に誘ひ給へ。もし世におはせば、御顏見せ給へと、佛を念じつつ、ありけむ樣をだに覺えねば、唯親おはせましかばとばかりの悲しさを、歎き渡

り給へるに、斯く差當りて、身の理なきままに、取返しいみじく覺えつつ、辛うじて棒市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせず往き著き給へり。

玉鬘は勿論、繼子いじめとは何の關係もなく、當時の王朝貴族の社會に於ては、事實屢々起つたかも知れない孤兒の一人であつたのだが、繼子物語を幾つか讀んだ後の私には、何故かこの文章が玉鬘の境遇に繼子の姫君達と共通したもののあることを感じさせるのである。玉鬘が筑紫にあつて、その地方に勢を振つていた大夫の監というえびす男に言い寄られた時の事を回想した、「住吉の姫君の、差當りけむ折は、然るものにて、今の世の覺えも猶心殊なめるに、主計頭が、ほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思しなぞらへ給ふ」とある詞の中の住吉の姫君は、繼子であつたかどうかは譯らぬが、これと同じ樣な佗しい目は、後に述べる狹衣物語の飛鳥井姫君や、秋月物語のあいきやうの君の經驗したところでもあつた。つまり、玉鬘はやがては繼子いじめえと繫つてゆく物語の女主人公の類型の上にあつたと言えよう。そして玉鬘が、長谷參籠を機緣として、沈淪の境遇から脫し、新しい運命を拓くことが出來たのは、この物語の表面には強く說かれていないけれども、繼子いじめ譚の主人公達が、神佛の加護に依つて、最後には幸福をかち得たのと同じく、靈驗譚としての性質を備えていたことを物語つているのではなかろうか。

一體、長篇小說としての源氏物語が出來る過程には、それに先行する幾つかの中篇、短篇の物語があり、それらが光源氏という一人の主人公に依つて統一せられてきた事を考えねばならない。武田宗俊氏が數年前、「源氏物語の最初の形態」という論文の中で、源氏物語の所謂第一部と言われる部分を、紫上系と玉鬘系との二つに分け、後者は後からの挿入である事を論證されたが、そういう考え方が可能な程、この玉鬘に關する物語は、明かに一つの獨立したぷろつとをなしている。つまり、先行する中篇小說の有力な一種であつたと言う事が出來る譯である。玉鬘系と呼ばれる卷々には、何故か、玉鬘の外にも、夕顏や末摘花など、薄幸な女性を題材とした話が多い。私は、こう言つた種類の物語が、當時數多く存在していたのではないかと想像しているのである。

後期王朝の文學に現れたさすらいの女君のもう一つの例として、文學史の上で源氏物語の影響を強く受けたものとされている、狹衣物語の飛鳥井姫君を擧げてみよう。狹衣物語にも、幾人もの女性が登場してくるが、作者の意圖から言えば、その女主人公は、狹衣大

將と幼い時から共に育つた源氏宮であるらしく見えるにも拘らず、實際に最も多く筆を費しているのは、この飛鳥井姫君なのである。この女君も、父母に早く死別れ、乳母に養われてかすかな生活をしているという、玉鬘ともよく似た境遇の女性である。或る時、太秦に詣でた折に、かねて想いを懸けていた仁和寺の威儀師某と稱する僧にかどわかされようとしたが、幸い途中で行き逢つた狹衣大將に救われる。これが緣となつて、其後狹衣は姫を忍び妻として通うようになつたのであるが、それ迄經濟上の援助を與えていた威儀師との關係が切れてしまつた爲に、姫君の家は生活に窮してくる。それに狹衣は、自分の素性を明さないので、これを賴むことも出來ない。そこで乳母は、前々から姫を望んでいた式部大輔道成という男に女君を託そうと考え、姫を欺いて道成が筑紫え下る舟に乘せてしまう。途中、譯を知つて驚きと恐怖に泣く女君を道成は、慰めたり、口說いたりするが、どうしても從おうとせず、遂に虫明の瀨戸を通る時、扇に一首の歌を書き殘して入水してしまう。然し、この時は助けられ、尼になつたが、やがて狹衣の忘れ形見をのこして亡くなつた。

この飛鳥井姫君は、源氏物語の夕顏と浮舟の二人をモデルにしたものだと言われている。然し、そうした直接のモデル關係よりも、よく似た境遇をもつ薄幸の女性の物語が、この頃の文學の素材として特に有力であつたということに、大切な問題があるのではなかろうか。飛鳥井姫君の如き哀れな運命を辿つた女性が、物語の上で非常な人氣を博していたことについては、三谷榮一氏が、その著「物語文學史論」の中で委しく論ぜられている。それに依ると、平安朝時代の末から鎌倉時代えかけて、飛鳥井姫君と同じ類型の主人公を扱つた作品が多くあつたことを、當時の散秩物語について、風葉集や無名草子などに遺された斷片的な記事を辿りながら論證せられているのであるが、惠まれない繼子の姫君の物語が輩出したのも、やはりこれと同じ當時の讀者の悲劇趣味とでも言うべきものの上に生じた現象と言う事が出來るであろう。

狹衣物語の飛鳥井姫君と繼子苛め譚とを結びつけるには非常に都合の良い材料がある。それは、お伽草紙のさごろもである。この草紙は、狹衣物語の飛鳥井姫君に關する部分だけを抜き出して書き直したといつた性質のものである。私はまだこのさごろもを直接讀むことが出來なかつたのだが、日本文學大辭典に依つて梗概を見た處によると、姫君が入水する迄は前代の狹衣物語とほぼ同じであるが、其の後がやや變化している。卽ち、入水した姫君は偶々通り合わせた兄の筑紫安樂寺の別當に救われ、共に都え歸つて洛西の常磐に假

住居をする。一方、姫君の行方を失つた狹衣中將は、姫を探す爲に諸國行脚の旅に出た。諸國を巡り巡つた後、奈良の大佛に參籠した折に、同じく中將の行方を尋ねていたかの別當と行逢い、姫の居所が知れるというのが、その新しい筋の展開である。これと、住吉物語系統の諸作品に共通した筋とを對比させてみると、

（一）惠まれない境遇にある姫君と、身分の高い貴公子との戀愛

（二）姫君が突然都の外えさすらい出ねばならなくなること

（三）失踪した姫君の行方を尋ねて貴人が旅に出ること

等の主要な筋立に於て全く一致していることが訣る。ただ彼に缺けているのは、繼子いじめという趣向だけである。卽ち、狹衣物語が、御伽草紙のさごろもえと變化していつた過程に、もう一つ繼子いじめの趣向が加われば、鎌倉室町期の繼子苛め譚の或るものは出來上るという譯である。

木幡の時雨

今一つ、これと同じ樣な作品に、國語國文第七卷第十號に玉上琢彌氏がはじめて飜刻紹介された木幡の時雨と稱する物語がある。この物語は、無名草紙、風葉集等をはじめ、下つては江戸時代の書目類に至る迄、その名が見えない爲に、成立年代を傍證に依つて明かにするよすがが全く無いのであるが、玉上氏は、木幡の時雨の中の源氏物語に依據した詞章が、室町中期の定家崇拜熱の勃興以後、殆んど用いられなくなつた河內本の系統に依つていること、筋の展開に神祕力を借りていないことなどから、大よそ鎌倉時代と見てよかろうと推定せられている。次に述べるように、住吉物語などと非常によく筋が似ていながら、靈驗譚の色彩が無い事も、住吉よりはずつと平安朝の物語に近い。未だ知られるところの少い作品であるから、やや委しく內容を紹介しておこう。

奈良兵部卿右衞督の女、中の君は、父に死別した後、三人姉妹の中で、一人母に疎まれ、佗しい日々を送つている。木幡の里に住む

父の乳母の許に身を寄せていた或る日、折からの時雨を避けて一夜の宿をとつた時の關白の御子、殿の中納言に見出され、二人は互に許しあう仲となつた。中納言が歸途再び立ち寄る事を約して立ち去つた後、中の君は母の病氣の爲に俄かに邸え呼び戻される。中の君の行方を失つた中納言は悲歎に暮れたが、やがて人々の噂から、故右衛門督の女であることを知り、その邸え文を送る。然し中の君を憎む母君は、これを悅ばず、代りに寵愛する三の君をすすめる。中納言は餘儀なく三の君と結婚し、雙生の女子迄儲けたが、やはり中の君の俤が忘れられず、欝々として樂しまない。一方、中納言との間を割かれた中の君は、石山なる叔母の許に身を避けていたが、ここでまたまた時雨が緣となつて、帝の皇子式部卿親王と結ばれ、一夜の契りで懷胎してしまう。それを中納言との關係と見た母君にますます辛く當られるので、生れた雙生の男宮を乳母子に預けると、自らは知人に誘われて攝津に下る。然し、其處でも生活の安定を望む侍女達が、乳母子の藏人兵衛佐を取持とうとするので、自らの運命をつくづくはかなんだ中の君は、夜に紛れて館を抜け出で、淀の大河に入水しようとした。丁度その時、落馬の傷を養う爲に津の國え下つていた中納言が、舟遊びをしていたが、入水の場所を求めてさまよう中の君を發見した。中納言の喜びは言うべくもなく、すぐに中の君を伴つて都え歸る。三の君はこれを聞いて自ら身を引き、その腹に出來た雙生の女子は、式部卿親王の男宮と共に、中の君の養うところとなる。一方、春宮となられた式部卿親王は、石山の姫を想われて日夜懊惱して居られたが、中の君から一部始終を聞いた中納言は、中の君の代りに、二人の男宮と共に、妹の三の君を進める。やがて親王が即位されると、三の君の立后、男宮の立太子、中納言の二人の姫君の入内と打ち續き、一門繁昌をたたえる御世を迎えた。

中納言の母の君に對する求婚を母親が悅ばず、代りに三の君をすすめる事や、中の君が自分の家を遠れて攝津え下る事などは、住吉物語の大君の經驗した境遇と極めてよく類似して居り、又、殿の中納言が落馬して傷ついた腕の療治の爲に溫泉え行つた歸途、中の君に再會するのは、岩屋の草紙にも見られる趣向である。この樣に中の君は、繼子いじめの物語の主人公である女君達と非常によく似た經歷の持主であるにも拘らず、ただ母親に疎まれた理由のみが異つている。それは、繼母繼子の關係ではなく、亡き父親が中の君の乳母少納言と關係して子供迄儲けた爲に、少納言に對する母親の嫉妬が、そのゆかり人である中の君に迄及んだという、極めて特殊な理

由に依るものであつた。

ところが、玉上氏が木幡の時雨に關する唯一の文献として掲げた、黑川道祐（元祿四年歿）の遠碧軒記に見える左の記事は、これについて興味ある問題を投げかけている。

小幡の時雨と云草子、源氏の少後の物なり。一册あり。灰屋紹益とり出す。文章面白き物なり。大旨は、時の關白、小幡邊に狩に出でて、時雨の晴をまつ内に、日暮て火の光をもとめて一宿す。其家に兄弟の女あり。あねはまま子なり。それが容儀よきによりちぎりて、それをくれよとあれば、まま母これをばいやと云て妹をやる。妹ならばいやと云てかへす。それよそれよといよいよあねにあしくあたるゆゑにめいはくがりて廣澤へ行て身をなぐべきと云をききて、關白かけつけて引かへして、石山邊にしるべ有てあづく。天子又これを聞て、石山へ行幸ありて尋れども、やけてしれかぬるを、やうやうに尋ねてつれてゆかむとあり。そこで云は、吾妹を關白殿へかたつけ給はば、命に從はんといふ。關白も天子と別れて相口ゆゑに妹は關白よび、あねは天子に行。この始終なり。

この梗概を見ると、現存木幡の時雨とは筋に大分の相違があり、特に後半にそれが著しいが、何よりも注意せられるのは、中の君に當る女が、ここでは繼子になつてしまつている事である。そこで、先づ想像されるのは、ここに「灰屋紹益とり出す」とある本が、現存本とは別種のものではなかつたかという事であろう。鎌倉室町期の物語、草紙類が常に夥しい異本群をもち、その内容もかなり流動している例から見て、この程度の變化を有する別本が存在したと考えることは、あながち無理とは言えない。若しそうであるとすれば、中の君が、ことさらに母親に疎まれた理由を、一方は乳母に對する嫉妬とし、他はまましい間柄であつたからとする、二通りの說明が、同種の物語の中に於て行われていたことになる。この事實は、こうした種類の物語の中心となる要素が、一人の不幸なる女性の運命の儘に押し流される哀れな生涯を描くところにあつて、何故その樣な艱苦の生活を忍ばねばならなかつたかという說明は、第二の問題であつたことを意味しているのではなかろうか。

然し、或は玉上氏の考えられたように、この二つの木幡の時雨は、同じものであつたのかも知れない。氏は、遠碧軒記に掲げられた梗概の相違に、現存本の終りの方にかなり廣範圍に亘つて見られる錯簡に原因するのではないかと推量し、更に、友人から借りて一讀

した書物の梗概を、幾年かの後に記憶を辿つて書いたものとすれば、この位の違いを生ずるのは當然であろうと述べられている。或はこうした場合も考えられなくはない。現存木幡の時雨を讀んでも、中の君の苛められる譯が餘りはつきり書けておらず、中世の御伽草紙の類に澤山現れた繼子いじめの物語に慣らされた者ならば、母親の差別待遇を受けた中の君を、繼子と速斷するような錯覺は、充分起り得ることだからである。こうして、道祐の見た木幡の時雨が、現存本と同じものであつたと假定すると、それは逆に言えば、昔の人にも、木幡の時雨が繼子いじめと見違えられる程、共通した性格をもつていたということになる。しかも一方では、この物語の主人公中の君は、侍女達の計らいで心に染まぬ男を強いられた事に對する、無言の抗議の形で入水を企てた點から見ても、明かに狹衣物語の飛鳥井姫君と一つ類型に屬するものである。從つて、この木幡の時雨は、平安朝から鎌倉時代えかけて、物語の素材として好んで用いられたさすらいの女君と、繼子苛め譚の女主人公とが、同一の基盤の上に立つていることを證明する一つの鍵であると言う事が出來そうに思う。

物語歌の類型

中世の繼子苛め譚、特に女性を主人公とするそれが、前代からの薄幸な女君の戀愛物語の引き續きである事を示す爲には、もう一つ觸れておかねばならぬ事がある。それは、こうしたさすらいの物語につきまとうている一つの歌の類型である。狹衣物語の飛鳥井姫君は、虫明の瀨戸で入水するに際して、

ほやき瀨の底のもくづとなりにきと扇の風よ吹きも傳へよ

の一首を扇に書き殘したが、この歌について、三谷榮一氏に興味ある論考がある。私はそれを少しばかり延長したに過ぎないのだから、少し長くなるが、その一節を引用しておこう。

それと同時に飛鳥井姫君があれ程異本を生ずるくらゐ、人氣を獲得したのは浮舟的人氣の庇護によるものであることは言ふまでもな

いが、そればかりでなく飛鳥井姫自身のもつ悲劇性の魅力によるものも多分にあると思ふ。その悲劇性は確かに卷一の終りで身を投じようとして殘した「はやき瀬の底のもくづとなりにきと扇の風に吹きも傳へよ」のもつ悲哀美だらうと考へる。御伽草子となつた「狹衣」の草子は狹衣と飛鳥井姫君とだけの物語にしてしまつたものであるが、その所收の和歌の殆ど全部は、原の狹衣物語の歌を改作したといふよりは、全く據所にしてゐないと思はれる程の相違をもつに拘らず、この「はやき瀬の」の歌だけは松會開板本に「わたつ海の底の水くづとなりぬらん扇の風に吹きも傳へよ」とあり、上野圖書館藏「さごろものさうし」には「はやき瀬の底の水くづとなりにきと扇の風も吹きて傳はれ」として居り、押小路家(?)舊藏の奈良繪本には「早き瀬の底の水くづとなりにてん浦路の風は吹きも傳へよ」と皆多少の相違はあつても、他の歌に比すれば殆ど原本通りといつても過言でなかつたくらゐ、忠實に原歌によつてゐる。それだけまたこの歌が如何にこの物語に於て重要視され、當時の人々の口の端に上つてゐたかが想像される。と共にこの歌のもつ飛鳥井姫君の投身悲劇譚が如何に人氣を呼んでゐたかもわかるのである。

(物語文學史論二九七頁)

この後更に、氏は、この歌が在原行平の須磨流謫の時の、「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつつわぶと答へよ」や、小野篁が隱岐の國え配流された時の、「和田の原八十島かけてこぎいでぬと人には告げよ蜑のつり舟」などと同じく、「私を想ひ尋ねる人があつたならば、私はかうなつてしまひましたとどうか傳へて下さい」という形式を踏襲したものであつて、こうした歌のもつ悲哀感が聞く人の心に同情を呼び起し、これを中心として悲劇的な流離譚の類型を幾つも成長せしめた事を論ぜられている。

そこで、同じように流離の境遇に沈淪した繼子の姫君達はどうであつたかと言うと、ここでも不思議な程の一致が見られるのである。

かりがねよ都の方へ行くならばしばしとどまれ言傳をせん　(秋月物語寫本)

かりがねも哀れをしらばたまづさを都の方へつてましものを　(秋月物語刊本)

はつ雁よ都へゆかばたらちをに我ありさまのものがたりせよ　(ふせやの物語寫本)

ゆくかたも知らでうき身のうかみ出でてありとも告げよあまつかりがね　(ふせや奈良繪本)

かりがねはしばしとまりて旅の空こしぢのかたをものがたりせよ

わが住みし都へゆかばかりがねよこのありさまをものがたりせよ

（以上二首美人くらべ）

ここに擧げた六首は、いずれも繼母の命を承けた武士に邸から盗み出され、既に命を失う處を危く助かった姫君が、自らの運命を歎いて詠んだ歌である。

又、專ら中世の物語目錄としての用途を滿している風葉和歌集の卷八には、「こころにもあらずふる鄕をはなれてさすらへけるに初雁のなくをききて、ふせやの關白北方」として、

雁がねよしばしとまりて旅の空こひなくかたの物がたりせよ

の歌が掲げられている。私の見た範圍内では、現存ふせやの諸本にはこの歌はなく、美人くらべの方にこれと近似したものが見られるが、ふせやと美人くらべとは、一々別にする必要のない程、全く同種の物語であるから、ふせやの古い一本には、こうした形の歌も傳えられていたのであろう。それはともかくとして、風葉集が特にこの歌を、ふせやの物語の中から拔き出してきた事には意味があると思う。つまり、狹衣物語の「早き瀨の」の歌と同じ類型をなす歌が、繼子苛めの物語に於ても、やはり中心をなす要素となつていた譯で、この事は、鎌倉室町期に輩出した繼子苛め譚の性格を最も端的に物語つているのである。この論文のはじめに於て、繼子苛めの話の盛行した理由を、當時の家庭の子女の情操教育の上に與えた効果という點から說明したが、單にそれだけの動機に依つて、こうした形の物語が作られたのでなかつた事が、以上の考察で幾らか訣つて頂けたかと思う。ただ、その流離する女君が、繼子である場合の方が、聽く人の哀れを誘い易く、教育的な意味の上でも都合がよかつた爲に、繼子物語としての形が最も成長したのであろう。

室町小說に現れた繼子苛めの話としては、この住吉物語の系統を引く一類の作品の外に、現存の昔話と更に直接の交渉をもつ、鉢かづき、花世の姫、姥皮等があり、繼子の流離の生活の意味を考えるには、是非その方にも觸れておかねばならないのだが、既に先人の論考もあるので、ここでは省略する事にする。

四、貴人の妻覓ぎ

薄幸な女性に關する戀愛物語の一つの變型と言う事の出來る住吉以後の繼子物語には、もう一つ、やはり流離譚と名づくべき形の話を伴なつている事が多い。先に狹衣物語から轉化した御伽草紙の狹衣と、住吉、秋月などとの比較の際に一寸觸れたが、失踪した姫君の跡を尋ねて旅に出る貴人の物語がそれである。

住吉物語では、未だ平安朝の戀物語としての色彩が濃く、前半の少將と大君との戀の經過を物語る部分に中心があつて、姫が姿を隱した後、少將が初瀨で示現を蒙つて住吉え下るくだりには、さして重みがかかつていないのであるが、その後の作品になると、この部分がずつと成長し、流離譚としての姿をはつきり見せてくる。特に秋月物語は、同じ系統のふせや、美人くらべ、朝顏の露の宮、岩屋の草紙などに比して分量が遙かに多く、室町時代物語集に收められた二種類の秋月物語の中、短い方の刊本にしても、凡そ他の三倍もの長さをもつているが、前半の繼子苛めの部分にはその中の僅か四分の一程度の紙面しか費して居らず、殘りの四分の三は、關白の御子三位中將の筑紫下りに關する物語なのである。又、朝顏の露の宮は、長さはそれ程でないが、朝顏の上を慕つて旅に出た露の宮をして、北は奧州の果から、南は九州に至る迄の全國津々浦々を經廻らしめ、その詞章も、七五調を基幹とした道行文を以て綴られるという、典型的な旅行の文學えと成長している。狹衣物語から狹衣の草紙えと轉化してゆく過程に於て、やはりこの種の趣向が新しく加わつた事も、同樣の傾向として見逃せない。

今、秋月物語に例をとつて、その內容を觀察してみよう。三位中將は二世の契を交したあいきやうの君が、何者かに掠められて行方を失つた歎きの餘り、淸水に參籠して祈願を盡すと、「君がとふ人はこれより波路わけこころつくしにゆきてたづねよ」との御告を蒙る。そこで、山伏姿に身を窶して西國え旅立つと、途中二十四五ばかりの冠者と道ずれになつた。この冠者は實は觀音の化身であつて、中將を、熊野下向の尼があいきやうの君を救つて養育している秋月の邸えと導く。折柄、尼の邸では、姫を奪おうとする九州の國司、

帥の大貳に備えて警戒が嚴しかつたが、一人の女房の同情に依つて、尼と親しい三河の法印の弟子と伴つて宿を借りる。その夜、中將が途にて冠者から授かつた横笛を吹きならすと、姫君がこれを聞きつけて不審を起し、琴を以て應答する。この有樣を見た尼は、事情を覺つて二人を對面させるという段取になるのである。

ところで、この物語の性格を考える重要なぽいんととなるのは、中將が吹いた横笛の音が、姫君との再會を遂げるきつかけとなつたという點ではないかと思う。ふせやでも、奈良繪木の方には、にほいの姫を尋ねて信濃のふせやに下向した左中將が、姫君のかくまわれている館の外で笛を吹く條が添加しているが、この笛の話を伴なう貴人の妻まぎの物語は、この外にも、この頃の民間文藝には屢々繰り返された趣向なのである。譬えば、中世文藝の最も人氣ある主人公であつた源氏の御曹司などは、五條の大橋をはじめとして、その行く處常に笛の話がつきまとうている。奥州えの下向の途次、三河國矢矧の長の許で淨瑠璃御前との戀を成就したのも、姫の館の外で吹いた横笛の音がその導きをしたのであつたし、（淨瑠璃十二段草紙）遠く蝦夷ヶ島に出向いて秘密の兵法を盗み出す事を得たのも、幾度かの危難を免れしめた笛の德に依るものであつた。（御曹司島渡り）又、舞の木の「烏帽子折り」に草苅笛の由緒として述べられた山路が笛の物語は、十二段草紙の先型とされているものであるが、この方になると、秋月物語の中將筑紫下りとの類似が一層著しい。そのあらましを述べると、

昔、用明天皇が后となるべき人を求める爲に、六十六本の扇に繪女房を描かせ、國々え廻して、如何なる賤の女なりともこの繪に似た者あらば一の后にすべしと觸れさせる。すると豐後國萬の長者の女、王よの姫は繪女房に勝る美人と申上げるものがあつたので、天皇は長者に難題を言いかけ、それが出來ずば女を差出せと仰せられる。然るに、その難題を見事に仕遂げてしまつたので、遂に天皇は自ら身を變して豐後え下り、山路と名のつて長者の牧童に住み込む。そして夜深く黄牛の背に跨つて吹きすましたというのが、この草苅笛であつた。

そうして、結局天皇は妻求めに成功されるのであるが、この話の後半が、秋月物語などの筋立と關係があつたとする事は空想とは言えまい。この樣な身分尊き御方が遙々鄙路えお下りなされたという傳えは、今なお、傳說の形で處々に保存せられ、これが中世文藝に

於ける一旦の思いつきではなく、民族の悠遠なる信仰に基くものであつた事を物語つているが、こうした傳說が、一方で蛇聟入や猿聟入の昔話に迄零落した一聯の異類婚姻譚と本來源を一にする事は、柳田先生が、「桃太郎の誕生」や、「炭燒小五郎の事」の中で明かにせられている。卽ちこれは、賀茂と三輪の二所の玉依姬の古傳が代表しているところの、神と人間の淸らかた處女との婚姻に依つて貴い御子の誕生を物語る、古い神話の名殘であつたのである。玉依姬の名は、神の尊い靈魂を宿した處女をあらわすに誠にふさわしいものであるが、山路が笛の萬の長者の女が玉よの姬であつたことは、この神婚譚の形式をよく傳えていると言えよう。これが用明天皇の妻まぎの物語として傳えられるに至つたのは、天つ神の御子を、昔はすべて太子と稱した爲で、玉よの姬との間に儲けられた太子を、我が國の太子の中でも最も著名なる聖德太子に附會した結果であつた。そして更に、山路の草苅が特に著名になつた原因は、之に伴なう笛の曲にあつたのではないかと柳田先生は想像せられ、

私は最初この山路の草苅の著名になつた原因は、古くから傳はつて居た面白い舞の手の印象であらうと考へて居たが、今はそれよりも强い力が、之に伴なふ笛の曲に、在つたのでは無いかと思ふやうになつた。卽ち昔も人類文藝の最も興味ある題目として、殊に傾聽せられて居た美女と英傑との婚姻譚の中に、必ず篠笛の或る定まつたメロディを以て、人を異常の昂奮に誘ふを例とするものがあつて、たまたまその一つの型が舞の本、もしくは之を承繼いだ淨瑠璃御前の物語に、保存せられて居たやうに考へられて來たのである。

（桃太郎の誕生）

と、述べられている。

笛が元來神聖なる祭の場所に於て神を迎える際の重要な樂器となつていた事は、今なお、神樂や能の舞臺にその痕跡をとどめている。神婚譚の末流たる、貴人の旅寢の物語に、笛が伴なうているのには、深い理由があつたのである。同じく舞の本の「笛の卷」には、母常盤が牛若君に與えた笛の由來を長々と語つているが、秋月物語の三位中將が授つた笛も、ただの笛ではなかつた。「此の笛と申すは、靈鷲山ふしやく王の笛なるが、羅喉羅尊者にゆづり給ふ。その後、大梵天王に奉り、それより兜率の內院、彌勒菩薩のもち給ふが、四王天にわたり、多聞天にゆづり、補陀落の聖觀音につたはり、さて此女房に給ふなりとて、中將殿にぞ奉りける」と言つたものもし

い由緒來歴を有するものであつたが、しかも、この笛を授ける時には、「かまへて、此笛を吹き給ふときは、精進潔齋して吹き給へ」という詞が見えている。こうした一寸した詞の端にも、笛に依つて妻まぎの目的を達する事を得た物語の奥に潜んでいる古い氣持を、推測せしめる資料が保存せられているように思う。

なお、秋月物語では、中將があいきやうの君との再會を遂げた後も、すぐには歸京せず、一冬を尼の館に過すのであるが、その間に、國司帥の大貳をはじめ、九州一圓の武士達にかしずかれて、關白の御子としての權勢を示す部分があり、これが又意外な程詳細であつて、同類の外の物語と較べて著しい特色をなしている。それは恰も、政治上の實權を握つた武家に對して、全く無力となりつつあつた宮廷貴族が示したせめてもの虚勢であるかの如き感じを與えるのであるが、この權力讃美の思想には、津田左右吉博士が「繼子苛めといふ主題よりも、權家の貴公子が自己の權勢を利用して、わが妻の爲に憎いと思ふ中納言の夫人をさんざんに翻弄し、さまざまに苦しめた後、それにわづかばかりの恩惠を施す點にこの物語の骨子があるので、中納言夫人が憂き目を見せられて怨みに怨み泣きに泣くと共に、この貴公子に引き上げられて世に出ることのできたその子どもらが、心の限り追從してあるくところに興味の中心があつた。」（文學に現れたる國民思想の研究、貴族文學の時代）という意味の批評を下した落窪物語と、一脈相通ずるものが見られる。津田博士は落窪物語に見られるこの權勢無上主義を、藤原氏の攝關政治がその頂上に達した平安朝中期に於ける貴族社會の權勢觀が反映されたものと解釋せられているけれども、同じ貴族生活の絶頂を描いた源氏物語や榮華物語と比較すると、私にはどうも色彩の違いが感ぜられるのである。落窪物語では繼母に對する復讐の爲とは言いながら、ことさらにその權力を誇示する風が見え、主人公は何事をも意のままに行い得る英雄に仕立てられている。それは丁度、秋月物語で、地方の豪族として尼の館の人々に恐れられていた國司をはじめ、その輩下の武士達を低頭平伏せしめ、人々をして今更ながら關白家の威勢に驚きの眼を瞠らしめた中將と同じである。どうもこれは、貴族生活の登りつめた頂上の生活から直接生れ出たものではなく、それに對して或る距離をもち、そこから生ずる憧憬と誇張とが働いているように思われるのだが、どうであろうか。鎌倉室町時代になつても、物語の上では、場面を宮廷貴族の世界にとつている場合が多いが、作者の無智から、そこには屢々おかしな記述が見られる。落窪物語の權勢描寫にも、そうした傾向を認める事は無理であろう

か。

第一、落窪物語の男主人公の戀愛に對する態度も、光源氏をはじめ王朝物語に現れてくる人々のそれとは全く異つている。この物語の中心思想を一夫一婦主義の提唱にあつたとする見方が出る程、少將の落窪の君に對する愛情は、他の女性を全く顧みもさせない、ひたすらなものであつた。それは、室町期の繼子苛め譚の男主人公達に共通して見られる戀愛態度に近く、古代の日本人が表面はともかく、生活感情としては認容していた、色好みの德を備えた男性とは甚だ遠いものである。こういう主觀論で一つの作品の成立年代を云々する事は實は無意味なのだろうが、前に言つた、繼子苛めの段階に於ても、落窪物語が進んだ形を示している事と併せて、この點からも、現存落窪の成立に關する疑問が深まつてゆかざるを得ない事を記しておく。

五、繼子を保護するもの

實母の靈

以上で、住吉物語系統の繼子苛め譚については、その筋立を大よそ辿り終つた譯であるが、最後に、繼子話に見られる今一つの大切な趣向として、不遇なる繼子の危難を救い、保護するものが何であつたかという事に觸れておかねばならない。外國の繼子說話を見ても、動物其他が繼子の保護者として登場して居り、ここに見られる特徵の異同は、此の種類の說話を分類する標準と考えられていた程、重要な要素だからである。

秋月物語とふせやでは、繼母方の武士に邸から奪い出された姫君が、水中に沈められた時、それを救い上げたのは、實母の靈が化してあらわれたところの龜であつた。岩屋の草紙では、武士が姫君を水に沈めるに忍びず、海中の岩の上にとり殘して立ち去るのだが、姫君が悲歎の餘り、自ら入水しようとすると、虛空に實母の聲があつてこれを止めるので、結果から言えば、やはり姫を死から救つた

ものは、實母の靈と言う事になろう。亡き實母の魂魄が我子の危難を見て、救いに現れるのは、繼子話としては極く自然な筋立の樣に感ぜられるが、これを問題にしなければならないのは、龜の如き動物に姿を借りて現れたとした點である。

今昔物語の卷十九に載せられた「龜報二山陰中納言恩一語」は、寶物集、十訓抄、三國傳記、長谷寺靈驗記や、源平盛衰記にも見え、當時かなり流布していた說話らしく、その內容も室町小說の繼子物語と關係の深いものである。そしてこの話にも、繼子の救助者として龜が出てくるにも拘らず、ここでは、その龜が亡き實母の假の姿ではなくして、動物報恩譚の形をとつている事に注意せねばならない。卽ち、

延喜の天皇の御代、中納言藤原山陰という人が居て、寵愛する一子を繼母に預けて育てていた。中納言が大宰帥となつて鎭西に下ることになつたところ、その兒を失う機會を窺つていた繼母は、途中鐘の岬という處で過ちの樣にして若君を海中に取り落す。すると嘗て中納言が住吉で鵜飼の手から助けてやつた龜が現れ、若君を背中に乘せて船の後から追つて來た。死骸を探しに出た中納言の家來達が、それを見つけて無事に連れ戻る。

という話で、この若君は後に出家して如無僧都と名のつたとある。

動物が命を助けられた恩返しをする話は、今昔物語にも屢々見え、心なき動物にてすら然り、まして人間にして恩を忘るる如きはあるまじき事という教訓の材料として、この時代には大分流行したのであるが、ところがその一方では、何等の恩惠も受けた事の無い動物が、人間を助けた話も存在しているのである。比較し易い材料を擧げると、譬えば、宇治拾遺物語の「魚養の事」という話に出てくる魚養という人物は、遣唐使某が唐土の女との間に儲けた子で、幼い時、夫の遣唐使が日本え歸つたまま、約束の消息を寄來さないのを怨んだ母親の爲に、「宿世あらば、親子の中は行合なん」といつて、海に投げ入れられたという、前の如無僧都とも大分似通つた經歷の持主であるが、その時も、やはり大きな魚に助け乘せられて難波の浦に漂着している。然し、ここではその魚についての記述は何もなく、如何なる因緣に依つて魚養が助けられたのかは、全然說明されていない。

又、同じく龜が重要な役割を勤めている浦島子の話にしても、報恩說話としての形が最も著名であるが、それが元來の形であつたの

ではない。御伽草紙の「浦島太郎」では、嶋子が龍宮に導かれたのは、一旦釣り上げた龜を放してやつた緣に依るのであつたけれども、古く日本紀や丹後風土記逸文に記された傳えには、この樣な放生の機緣はなく、單に釣り上げた龜が美しい乙女と化したと語つているだけであつた。然し、それだけでは物足りなくなつたと見えて、晉唐小說などの刺戟を受けた文人が、この傳說を小說化したものかと思われる「浦島子傳」になると、

水嶋子問二神女一曰。以二何因緣一故來二吾扁舟中一哉。又汝棲二何所一。神女答曰。妾是蓬山女金闕主也。不死之金庭。長生之玉殿。妾居所也。父母兄弟在二彼仙房一。妾在レ世結二夫婦之儀一。而我成二天仙 樂二蓬萊宮中一。子作二地仙一遊二澄江浪上一。今感二宿昔之因一。隨二俗境之緣一。子宜レ向二蓬萊宮一。將下遂二曩時之志願一。今ヒ爲二羽容之上仙一。

とあつて、既に、前世の宿緣というような說明が附隨してきている。つまり、浦島傳說になると、一つ傳えの中に種々の段階のあつた事が認められる譯である。

こうして見てくると、ある種の他界の生物が、時あつて人界との交涉を生じ、思いがけぬ幸福を齎したり、危難を救つたりする事があり得るものとする信仰がもとからあつて、前世の宿緣とか、命の親に對する報恩とか、孝行の德（御伽草紙の「蛤の草紙」などがこの型に屬する。草紙の浦島太郎も、常に海中のうろくづを採つて父母を養つていたとあり、同じ意識が働いているようである。）とかいう、種々の理由づけは、この信仰の合理化であつたと考えるのが、當を得たものであろう。繼子苛め譚の主人公となつた姫君達も、多くの民俗文學の主人公と同じく、隱れたる神の意志に依つて特別なる庇護を受くべき資格を充分備えた人々であつた。ただ、それが繼子苛めの話なるが故に、實母の靈が龜に化して援助を與えるという形えの變化が、極く自然になされたのである。

私は外國の繼子說話に關しては、甚だ乏しい知識しか持合せて居らず、比較研究などは到底覺束ない次第なのだが、グリム童話の「灰かぶり」の話を讀んで、一つ疑問に思つた事があるので、序に記しておこう。この話では、繼娘の希望を何時も叶えてくれるのは、一羽の白い小鳥であつた。そして彼女がその鳥の保護を受けるようになつた機緣は、父親から貰つた榛樹の小枝を、亡くなつた母親のお墓え植えた事に始まる。繼娘の涙で立派に成長したその樹の下え行つてお祈りをすると、そのたんびに白い小鳥がやつて來て、何で

も望み通りのものを投げ落してくれるのである。ここでは、小鳥が何故繼娘に援助を與えてくれるのかは説明されて居らず、動物援助譚の古い形を殘しているように思われるが、問題は、その援助が實母の眠つている墓地に於てなされている事にある。つまり、表面ではまだはつきりした説明を加えていなくとも、背後にはその小鳥を實母の靈と結びつけようとする意識が働いているように感ぜられるのである。

熊野比立尼

ところで秋月物語などに出てくる、實母の靈の化した龜は、「灰かぶり」の小鳥とは違つて、その果した役割が甚だ輕い。この龜は姫君を陸の上に救い上げるとその儘姿を消し、その後は少しも積極的な援助を與えていないのである。そうして、それから後の保護者としては、姫君とは何等のゆかりもない新たな人間が登場してくるのであつて、これが、中世文藝に現れた繼子物語の大きな特徴となつている。即ち、秋月、ふせや、美人くらべの熊野より下向の尼、岩屋の草紙の海士夫婦、朝顔の露の宮の化尼などがそれである。一體、何故こうした人々が現れてくるのであろうか。

その點を考える爲には、もう一度貴種流離譚の話に戻らなければならない。貴種流離譚の根源は、人界に流離し給う幼神の信仰に基くのであるが、そこにはそうした信仰の宣布に當つた神人團があつた。この神に奉仕する人々が、物語になると神の育み人として參與してくるのである。丹後風土記に見える、天女を養うた和奈佐老夫、和奈佐老婦や、かぐや姫を育み立てた竹取の翁、讃岐造麿などは、その形を適確に示している。幼神を育み立てた昔の布教者の、物語に參與していた事に就いては折口先生に御高説がある。ここでは唯、貴種流離譚と海部との關係について述べられた、次の御詞を引用させて頂こう。

貴種流離の譚に、海部の一人でも、乃至はあまといふ語だけでも、よくよくの場合は、海岸の生活や、自然の形だけでも、其に姿をまじへて來るのは、單に、この譚の癖といふだけではなかつた。かうした幼神の信仰を宣布した者が、海部の民の中にあり、その

信仰の爲の教典とも言ふべき口だての詞章が、常に語られている中に、海部自身には宗教であつても、その旅して過ぎた野山の國の村人には、單なる呪術と藝能とより外には、感じられなくなつたのである。その爲、彼らのすることは、絶えざるさすらひの旅であり、其旅人として、又旅の幼神の物語を、携へ歩くものと見られてゐた。

（日本文學の發生序説）

かの明石の窟で、姫君を守り育てた岩屋の草紙の海士夫婦が、海部の傳誦した文學の姿を、最もはつきり見せているものであることは、先生も指摘なされているが、又、住吉物語の大君が、住吉なる尼の許にかくまわれ、暫しの間を海濱の生活に送つたのも、同じ意味と解することが出來よう。同時に、秋月、ふせや等の物語で、かよわい姫君の養育者として、比丘尼が登場してくる理由も、又自ら明かになつてくると思う。しかも、それが熊野より下向の途次の尼であつたことは、この物語を流布して歩いたものの姿を、仄かに見せているものではないか。義經記や曾我物語をはじめ、熊野は中世に於ける數々の語り物文藝を生み出した源であつたのだが、この類の唱導文學の宣布に携わつた人々の中に、熊野の勸進比丘尼と稱する一群があつた。普通歌比丘尼と言われ、繪解をしながら、教訓的な物語を語つて、諸國を廻つて歩いたのである。

秋月物語で、三位中將が秋月の尼の館に宿ろうとした時、尼君が三河の法印なるものと親しい仲である事が、尼方の女房の口を通して語られている。その簡單な詞だけでは、三河の法印が如何なる者であつたか知る由もないが、三河國も又、中世文藝とは一方ならぬ關係のある土地であつた。卽ち、淨瑠璃御前の物語を生み出した參州鳳來寺は、唱導文學の又一つの發祥地であり、此處を中心として一群の說話業が榮えていたらしいのである。三河の法印という人物を、この三河の國を根據地とする布教者の仲間と結びつけることは、或は穿ち過ぎた考えかも知れない。そこ迄ゆかずとも、三河の法印が、熊野信仰と深い關係のあつた山伏の徒であるとすれば、（法印は山伏の異稱でもある）歌比丘尼には、山伏と夫婦關係を結んでいたものが多かつた程、これと密接な間柄であつた事から考えて、私には、これが秋月の尼君なる者の素性を、暗々裡に物語つている詞ではないかという氣がしてならないのである。

それはとにかくとして、さすらいの繼子の姫君と、それを養う尼の上には、折口先生の說かれた貴種流離譚の古風な姿が止められている事は明かである。繼子苛め譚の主人公達が、物語の上で說明せられているような理由に依つて流離しなければならなかつたのでな

い事に、この點からも確かめられる譯である。

○

私が數年前、卒業論文の對象として選んだのは、落窪物語であつたが、繼子苛めを主題とするこの物語の研究には、日本の繼子話の種々相を調べる必要があり、これを機緣として、室町小說或は近古小說と呼ばれる群小作品に入つていつたのであつた。過渡期の文學とされているこの種の作品は、文學としては極めて價値の乏しい、否、文學と呼ぶのも恥しい程度のものが多い。だから所謂鑑賞といつた立場から、作者の思想なり、才藻なりを論じようとするならば、はじめからたいした成果は期待し得ない。それにも拘らず、私がこうした種類の文學を殊更とり上げたのは、作品を幾つか讀んでいる中に、文學の發生という問題を考える上には、貴重な材料を多く保存していることが、朧氣ながら理會されてきたからである。文學として幼稚であるだけに、素材がむき出しになつており、その上、類型的作品の多いことは、比較研究を容易ならしめる。その意圖から、この論文では、落窪物語に關する考察はほんの餘論の程度にとどめ、住吉物語を中心とする、繼子苛め譚の類型の一つを當面の對象として、その筋立を逐一見てきた譯であつた。然し、このような問題は考える程奧行が深く、甚だ徹底しない、雜駁なものに終つたことを恥じている。